

今王2号墳

太宰府市の文化財第6集

1982

財団法人 古都大宰府を守る会

序 文

現在の大型開発に伴なう埋蔵文化財の破壊は深刻な問題である。本来、我々は過去の歴史、文化を正しく後世に受け継ぐべき責務を負っているのであるが、我々の現在の欲求である住宅、下水、交通、道路の整備と利用の前に埋蔵文化財は破壊されてゆく。破壊するのは直接的には工事施行者ではあるが、間接的には我々自身の欲求に他ならない。こうした文化財に対する加害者的な認識を国民一人一人が自覚することこそ、これからの日本の文化と伝統、人間性を不必要に破壊させない原動力となっていくのではないだろうか。

今王2号墳は株式会社たけした住宅の宅地開発により消滅した古墳であるが、幸いにもたけした住宅が調査費用を負担し、記録を完全に保存することができた。その成果は此度太宰府市教育委員会において、「太宰府市の文化財第六集、今王2号墳」として刊行された。財団法人古都大宰府を守る会では、より多くの人々にこの成果を御理解いただき、ひいては古墳文化の解明、また乱開発による埋蔵文化財の破壊を最小限にとどめたいという願いを込めて、この発掘調査報告書を増刷し、世に送るものである。

財団法人 古都大宰府を守る会

理事長 瓦 林 潔

目 次

I. 調査の契機	1
II. 古墳時代における周辺の環境	1
III. 古墳の調査	1
IV. まとめ	9

例 言

1. 本書は太宰府市が1981年度に KK たけした住宅より依頼をうけて発掘調査を実施した今王2号墳の調査概要である。発掘調査費用についてはたけした住宅の負担による。
2. 調査は太宰府市教育委員会が主体となり、教育長・陶山直次郎（総括）、社会教育課長・西山義則、文化財係長・黒板力、同文化財係主事・岡部大治（以上庶務）、文化財係技師・山本信夫（発掘調査）で組織を構成した。
3. 本書の作成と編集は山本があたり、図面の作製には岡部、狭川真一の協力を得た。製図は島田まゆみが行なった。
4. 遺構写真は山本が担当し、遺物写真は岡紀久夫氏が撮影した。
5. Fig 1 使用の地図は、国土地理院1977年作成 1 : 25,000 「太宰府」「二日市」「福岡南部」「不入道」の一部である。



Fig 1. 古墳時代主要遺跡分布図 (1/40,000)

1. 今王2号墳 2. 菖蒲浦古墳群 3. 今王1号墳 4. 集り古墳群 5. 松ヶ浦古墳 6. 石穴遺跡 7. 塚口古墳群
- 8~13. 御笠地区遺跡B~G地点 14. 吉ヶ浦1号遺跡 15. 同2号遺跡 16. 吉ヶ浦古墳群 17. 六本松遺跡
18. 六本松古墳 19. 杉の谷古墳群 20~23. 阿志岐古墳群A~D群 24. 脇道古墳群 25. 老松神社古墳群
26. 天山古墳群 27. 上ノ浦古墳群 28. イカリノ上古墳 29. 峠山周溝墓群 30. 銭塚古墳 31. 鳥井元古墳
32. 池田古墳群 33. 五穀神山古墳 34. カケ塚古墳 35. 大曲遺跡 36. 野黒坂遺跡 37. 君ヶ畑古墳群 38. 剣塚古墳
39. 埴安神社古墳 40. 唐人塚古墳 41. 原ノ前古墳 42. 原口1号墳 43. 鷲田山古墳 44. 原口古墳 45. 八ノ限古墳
46. 扇形古墳群 47. 来木古墳群 48. 妙見古墳群 49. 陣ノ尾古墳群

I. 調査の契機

今王2号墳は太宰府市大字太宰府字今王4148番地に所在する。昭和53年度に太宰府市教育委員会が行なった埋蔵文化財分布調査により、この古墳の所在が確認されており、いわゆる「周知の遺跡」として太宰府市教育委員会が把握していたものである。今王2号墳を調査することになった直接の契機は、株式会社たけした住宅が古墳を含む一帯に宅地造成を計画したためである。たけした住宅と市教育委員会で事前に協議を行なった結果、調査費はたけした住宅が全額負担し、調査は市教育委員会が主体となって実施する運びとなった。

調査期間	1981. 10. 1～11. 1
開発総面積	2.9万㎡
調査面積	700㎡
開発計画位置	今王4227—1、4148、4150、4227—51・52 4141. 4142
開発者	株式会社 たけした住宅 代表 竹下隆平

II. 古墳時代における周辺の環境 (Fig 1)

筑紫野の平野は北西の博多平野と南東の筑後平野を結ぶ分岐点にあたり、筑前と筑後を経済・文化などの面でつなぐ重要なルートに位置する。平野部は東西3km、南北2kmの範囲で北部は大城山(標高410m)、南西部は天拝山・牛頸山、東部は宝満山とその派生した丘陵群が接している。太宰府市から筑紫野市におよぶ古墳群を概観すると4世紀から7世紀に至る古墳の分布が知られ、その分布は宝満山から南側に張り出した低丘陵上や、牛頸山、天拝山の東方部に集中している。

原口1号墳・剣塚1号墳はこの地域における大形の前方後円墳で、それぞれ4世紀、6世紀の盟主的な存在であったと推定される古墳である。また菖蒲浦1号墳は古式タイプ円墳であるが後述するように原口1号墳の被葬者に次ぐ内容の副葬品を所持していることが注目される。いっぽう地域に散在する集団の有力者達も墓制の変化に伴い、小規模な古墳を営むようになる。峠山周溝墓群、宮ノ本古墳群、阿志枝古墳群B群、古剣塚古墳群などはこうした4～5世紀の族長墓と考えられるもので、中には北部九州の弥生時代の墓制を構造的な面で残すものや、一古墳の中に複数の主体部を有する家族墓的な性格を有するものも認められる。6世紀になると古墳の数が増加し阿志枝古墳群、八隈古墳群、塚口古墳群などに顕著な群集状況がみられる。7世紀後半には中央の上からの政策によって大宰府政庁跡を造営し、この地域の状況は一変するが、こうした中央勢力と地縁勢力がいかにかかわっていたかを検討する上で、後期古墳群と集落の解明が重要になってくることは論をまたないであろう。

III. 古墳の調査

立地と周辺の古墳群 (Fig 2)

今王2号墳は標高50mの低丘陵先端近くに立地する。狭小な平野を挟んで西側200mの丘陵には菖蒲浦1、2号墳があり、この古墳は1976年度に学校が建設される際調査された。菖蒲浦1号墳は2基

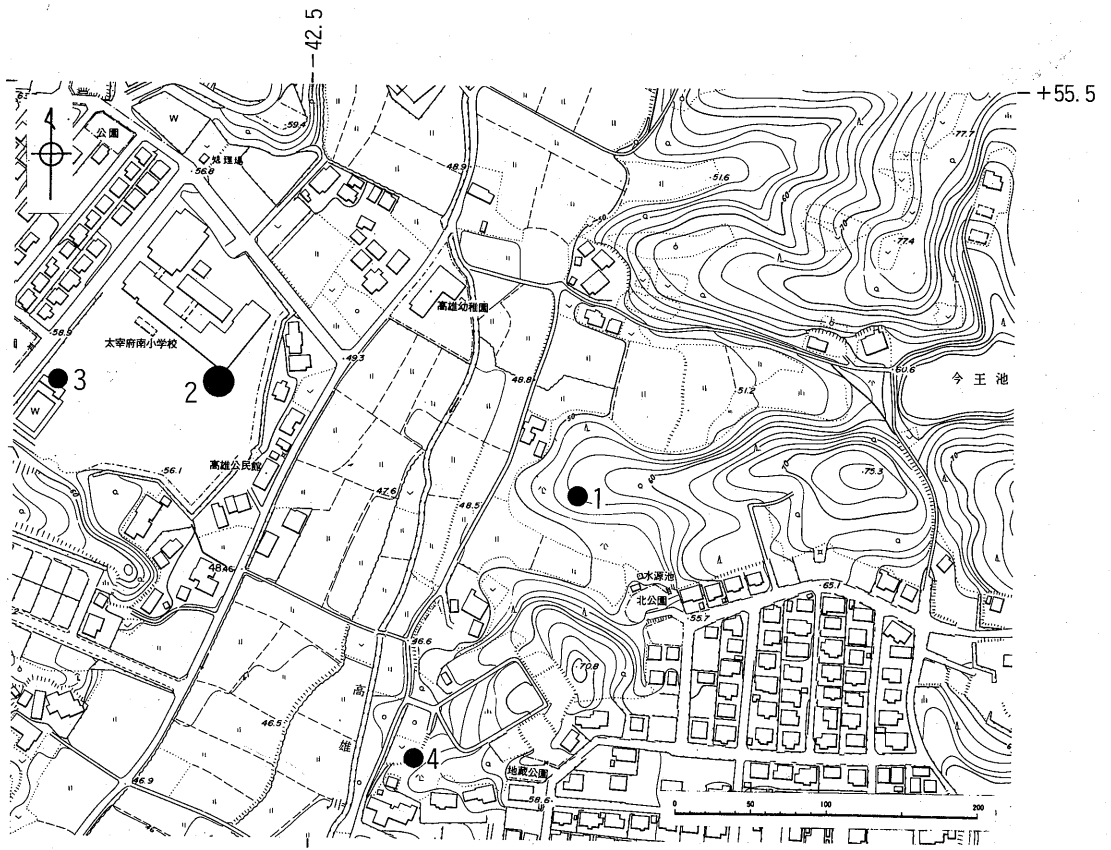


Fig 2. 周辺の古墳

1. 今王2号墳 2. 葛蒲浦1号墳 3. 同2号墳 4. 今王1号墳

- | | | |
|---------------|-------------------|--------------|
| 1. 黒色土 | 11. 白斑黄色土 | 21. 黄味赤褐色粘質土 |
| 2. 赤褐色粘質土(攪乱) | 12. 淡黄灰色土 | 22. 淡赤褐色粘質土 |
| 3. 暗茶褐色土 | 13. 暗黄褐色土 | 23. 赤褐色粘質土 |
| 4. 淡赤褐色土 | 14. 赤斑暗黄褐色粘質土 | 24. 赤斑黄灰色土 |
| 5. 黄灰色粘質土 | 15. 明赤色土 | 25. 白斑赤灰色土 |
| 6. 黄斑赤褐色土 | 16. やや暗い赤斑暗黄褐色粘質土 | 26. 赤斑淡黄灰色土 |
| 7. 赤褐色土 | 17. 暗黄褐色(旧地表) | 27. 暗灰色土 |
| 8. 赤斑黄褐色土 | 18. 赤褐色パイラン土 | 28. 淡灰黄色土 |
| 9. 黄色粘質土 | 19. 暗黄褐色粘質土 | 29. 茶褐色粘質土 |
| 10. 白斑赤色土 | 20. 19より赤味をおびる | 30. 明赤褐色土 |

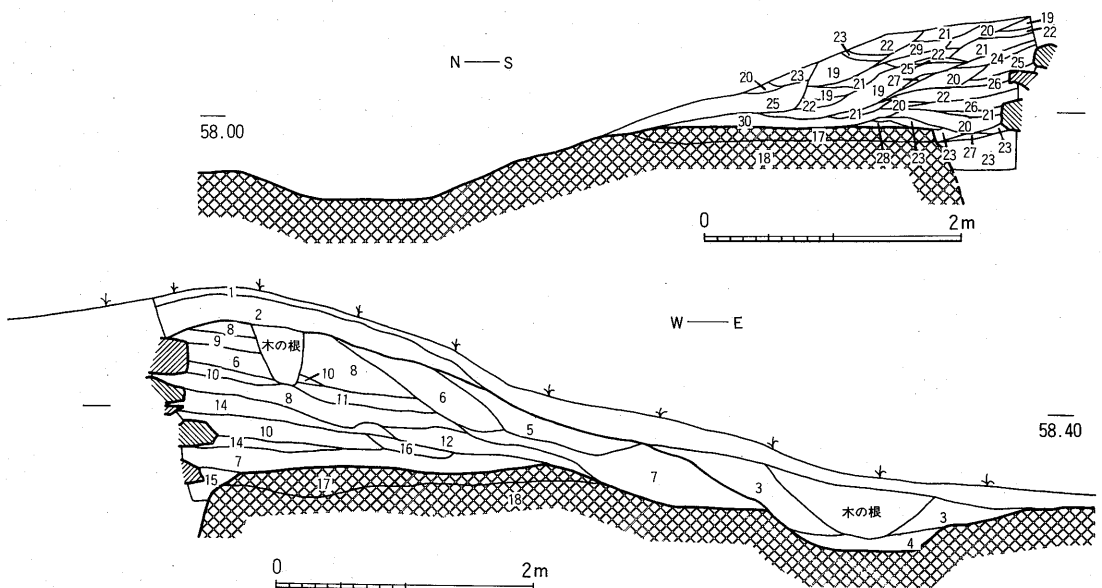


Fig 3. 墳丘土層図 (1/60)

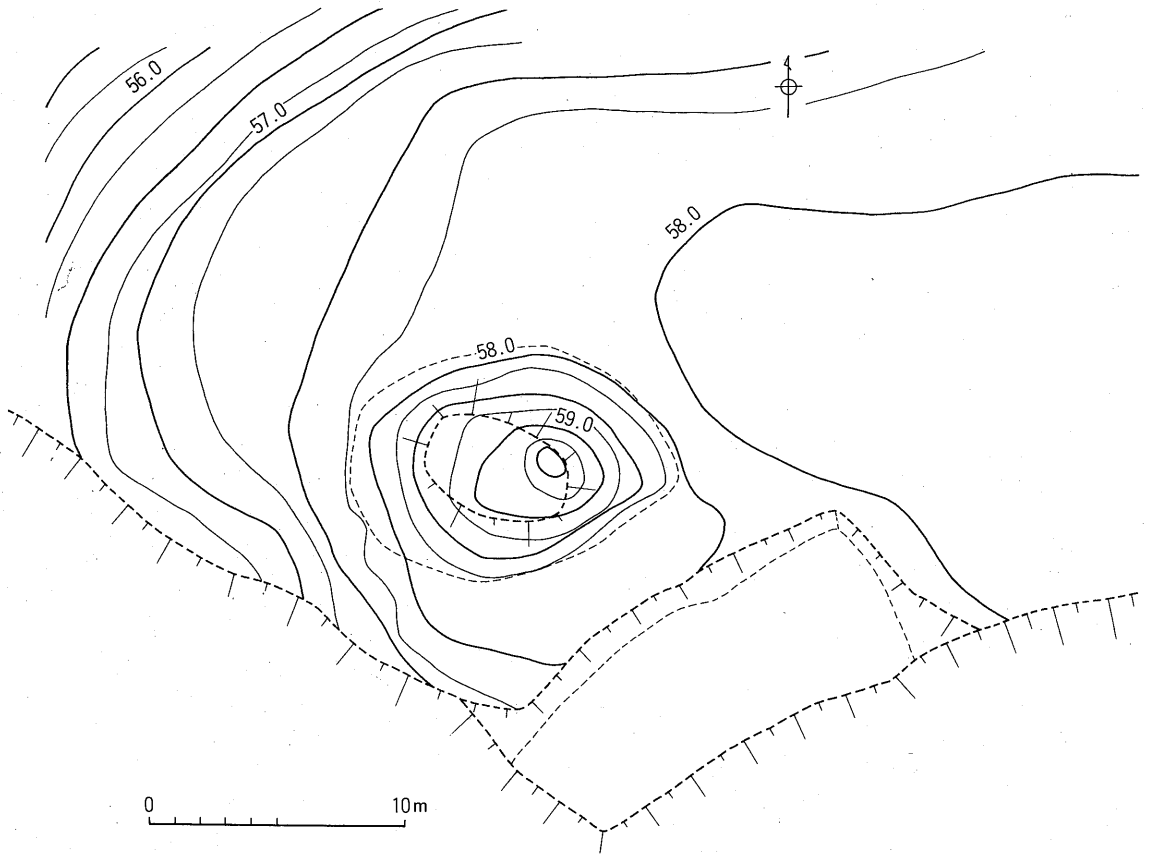


Fig 4 . 地形図、発掘前

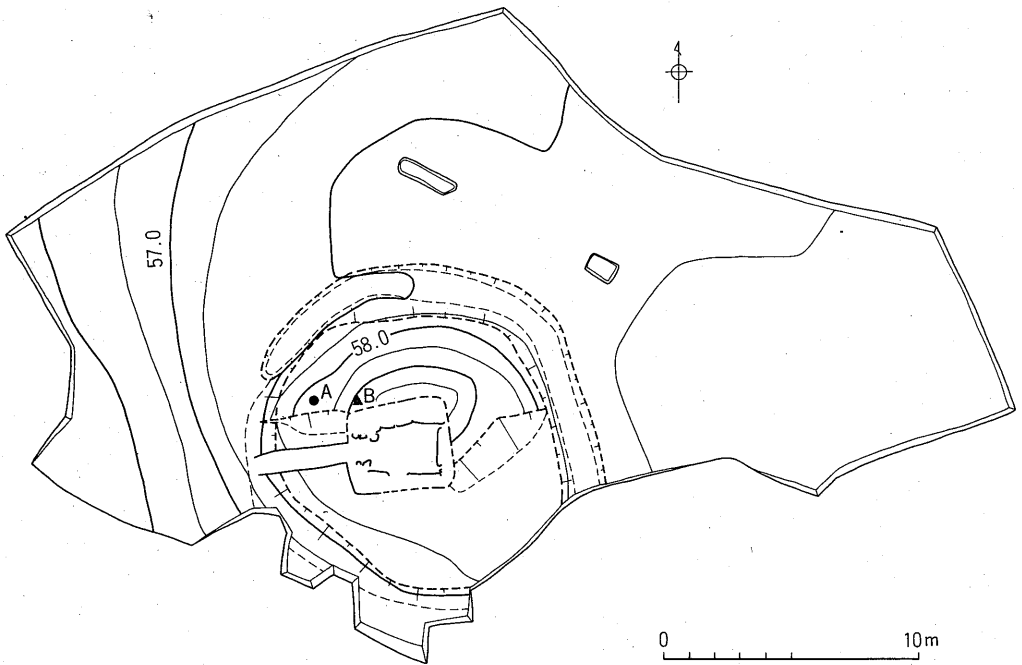


Fig 5 . 地形図、発掘後

の割竹形木棺を中心に5基の土壙墓、石蓋土壙墓の複数主体部を有する古式の円墳で、第1号割竹形木棺の主体部からは方格規矩鏡1、櫛7、勾玉1、白玉、鉄力1、針1、鉄剣1、鉄斧1、刀子3、鈍1、U字形鋤先1などを出土した。同2号墳は古墳時代終末期に属する円墳で主体部は両袖形の横穴式石室である。また南西200mの丘陵上には今王1号墳があるが、かなり破壊を受けており具体的な内容については不明である。

墳丘 (Fig 3～5)

後世に盗掘をうけているため墳丘の外観は楕円形状を呈していたが、調査の結果、内径12mの円墳と判明した。浅い周溝をめぐるし、墳丘の現存する高さは1.4mである。墳丘は丘陵尾根上の平坦面を選定して構築されている。

石室 (Fig 6)

主軸をN85°Eにとり、西側に開口する単室の両袖形横穴式石室である。石室は地山から0.6mの深さに穿った4m×3.4mの長方形墓壇に営まれ、腰石の部分はさらに墓壇底面を一段掘り凹めている。盗掘により天井石、南側壁を大きく破壊されており全容を把握することはできないが、その他の部分については比較的、保存が良好である。石室全長は3.5mである。

玄室は右側壁長2.7m、左側壁長2.3mで右側壁がやや長い^{ため}プランはいびつに見える。奥壁幅は1.9m、前壁幅は1.6mで、開口部が奥壁に対しやや短くなった寸ずまりの羽子板状プランを有する。周壁の状況については、奥壁には長さ1.5m×0.8m、厚さ0.5mの板石を横位置に用いて腰石とし、左側壁には長さ0.6～1.1m程の石材を3枚用いて腰石としている。また右側壁は腰石のみ残存するが、左側壁と同じように0.8～1.3mの石材を横位置に用いている。壁体は腰石上に塊石を積み上げ間を目ばりする方法で、残りのよい部分では1.5m分6段ほどが認められる。石材は全体的に小ぶりのもを使用している。壁体は下半部で直立に近く持ち送りは強くない。天井部の高さは古式の横穴式石室である点を考慮すると2m前後かそれ以下の数値が考えられよう。前壁についてはあまり保存が良好でない。袖石については、右袖石は3段ほど右を平積みし、左袖石は縦長に石を用いてその上に一段石を積み右袖石と上端部のレベルを合わせている。この上部に楕^{まぐさ}石を横置したと仮定すると横口部は幅0.5m、高さ0.7mの狭小なものに復原されよう。袖石間には仕切石を置く。

横口部に続く羨道部は、天井石の架構されない長さ0.8mの「ハ」字形に裾広がりとなる短筒なものである。

閉塞は一枚の板石を主体として、仕切石の外側から袖石にたてかけたものである。石室に使用された石材はすべて花崗岩である。

墓道は現存長4mで、墓道一仕切石の間は仕切石外側を埋め床面を同一レベルとし、玄室内は10cm程低くなる。

遺物出土状態

石室内……盗掘により徹底的に荒らされ、原位置に保たれたものはない。耳環は閉塞石内側の攪乱土から出土した。

墳丘内……北西部の墳丘上部 (Fig 5 の A、B) で土器を3点検出した。Aに須恵器横瓶、高坏、Bに土師器坏蓋を出土している。

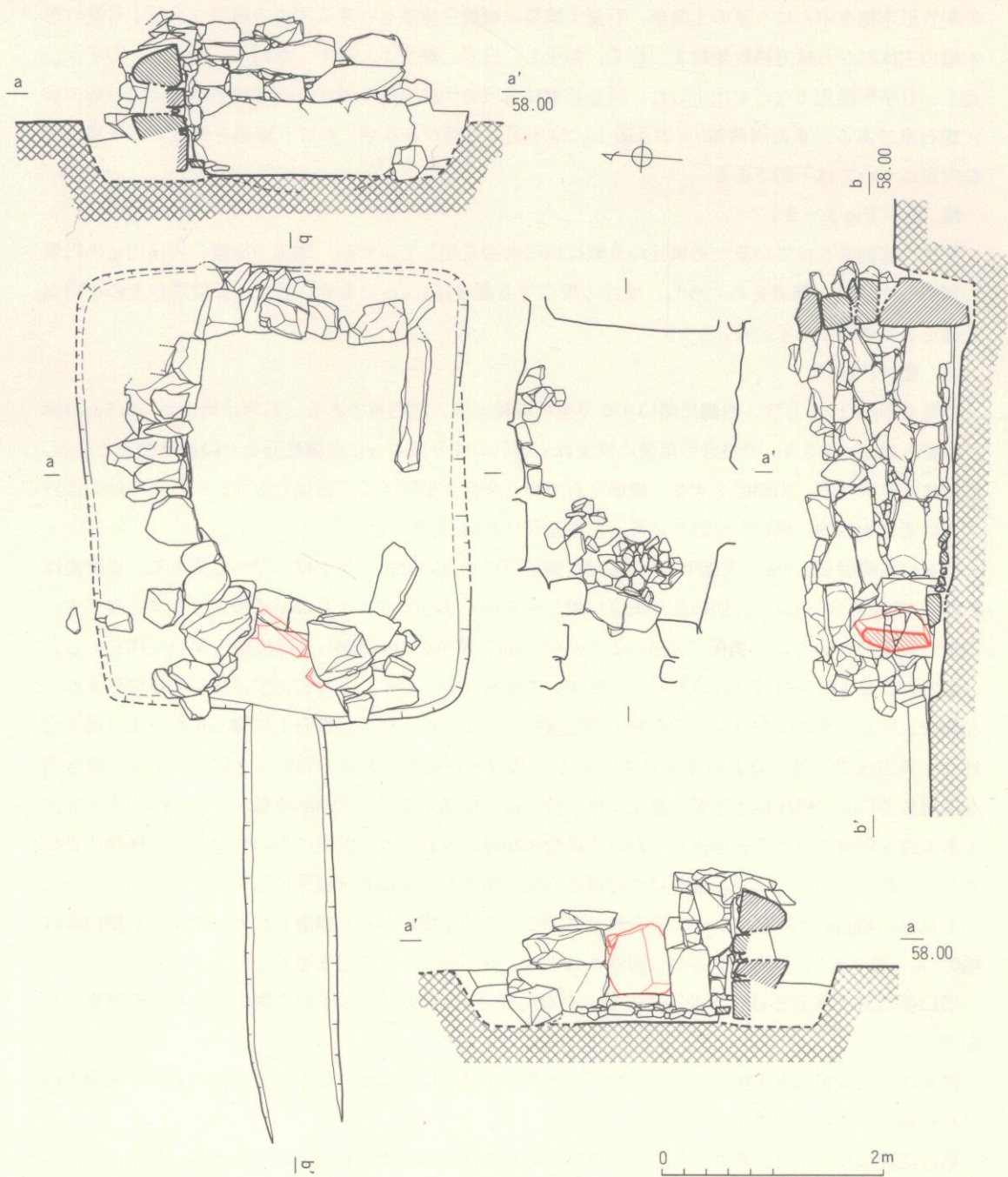


Fig 6 . 石室実測図 (1/60)

出土遺物一覧表

()点数 ● 図面参照 ▲ 土師器

墳丘上部	A ● 高坏(1) ● 横瓶(1) B ▲ 坏蓋(1)
石室埋土	● 坏蓋(3) ● 高坏(1) ● 甗(1) 器形不明(1) ● 耳環(1)
墳丘表土	● 坏蓋(3) ● 坏身(2) ● 有蓋高坏蓋(1) ▲ 椀 ● 高坏(1) 短頭壺(1) 甗(1) 壺?(2) 甗?(1)

出土遺物 (Fig 7)

1. 9、12は墳丘上部出土で古墳築造時に伴ったものである。

土師器

坏蓋 a (1) 天井部から体部へ移る外面の変換点に鈍い突帯を有する。体部はやや外開きをなす。天井部外面は丁寧な手持ちのへら削りを施し、器壁をうすくしている。復原口径13.8cm。墳丘上部B出土。

須恵器

坏蓋 a (2~6) 大きく3つのタイプに分かれる。

I……2、3

II……4

III……5、6

Iは体部と天井部の境の外面に突帯を有するもので、2は突帯の稜が鈍く、口縁内面に浅い凹線を入れる。3は突帯がシャープであるが口縁内面に凹線は持たない。3は坏蓋として図示したが高坏とも考えられるものである。2は口径11.0cm、器高4.6cm。石室埋土出土。3は口径12.0cm。表土出土。

IIは外面の突帯はなく、かわりに浅い段となったもの。口縁内面に凹線を有する。4は表土下出土。

IIIは外面の突帯もなく、口縁内面の凹線もなくなり丸く端部を仕上げるもの。器形は扁平化し丸味を有する。6は天井部に小のへら記号を有する。口径12.5cm、器高4.2cm。表土出土。5は石室埋土出土。

以上の坏蓋はI→II→IIIの変遷が考えられる。

坏身(7) 坏蓋IIIと組み合わせるものと思われる。蓋うけ部のたち上がりは弱く内傾ぎみである。底部外面に坏蓋6と同様なへら記号を有する。口径11.0cm、器高3.7cm。表土出土。

有蓋高坏蓋(8) 体部と天井部の境の外面に鈍い凹線を有し、口縁端は丸く仕上げる。天井部外面にかき目を有する。口径14.0cm。表土出土。

高坏(9~11) 9は坏部外面中位に鈍い突起を有し、口縁内面に浅い凹線を有する。脚部の透しは3ヶ所である。口径9.8cm、器高10.7cm。墳丘上部A出土。10、11は石室埋土出土。

甕(13) 口縁端部は三角形に折り曲げ、内面はやや凹む。胴部内面に粗い青海波の叩き目を有する。口径21cm。石室埋土出土。

横瓶(12) 口縁部を欠損する。外面は平行叩きの後、かき目調整を施し、内面は径4.5cm前後の細身の青海波叩き目を有する。底部は人為的に刺突された穿孔を有する。墳丘上部A出土。

金属製品 (Fig 8)

耳環 銅環に金張りしたものである。石室埋土出土。

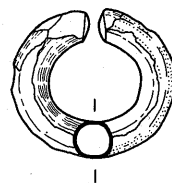


Fig 8. 耳環 (2/3)

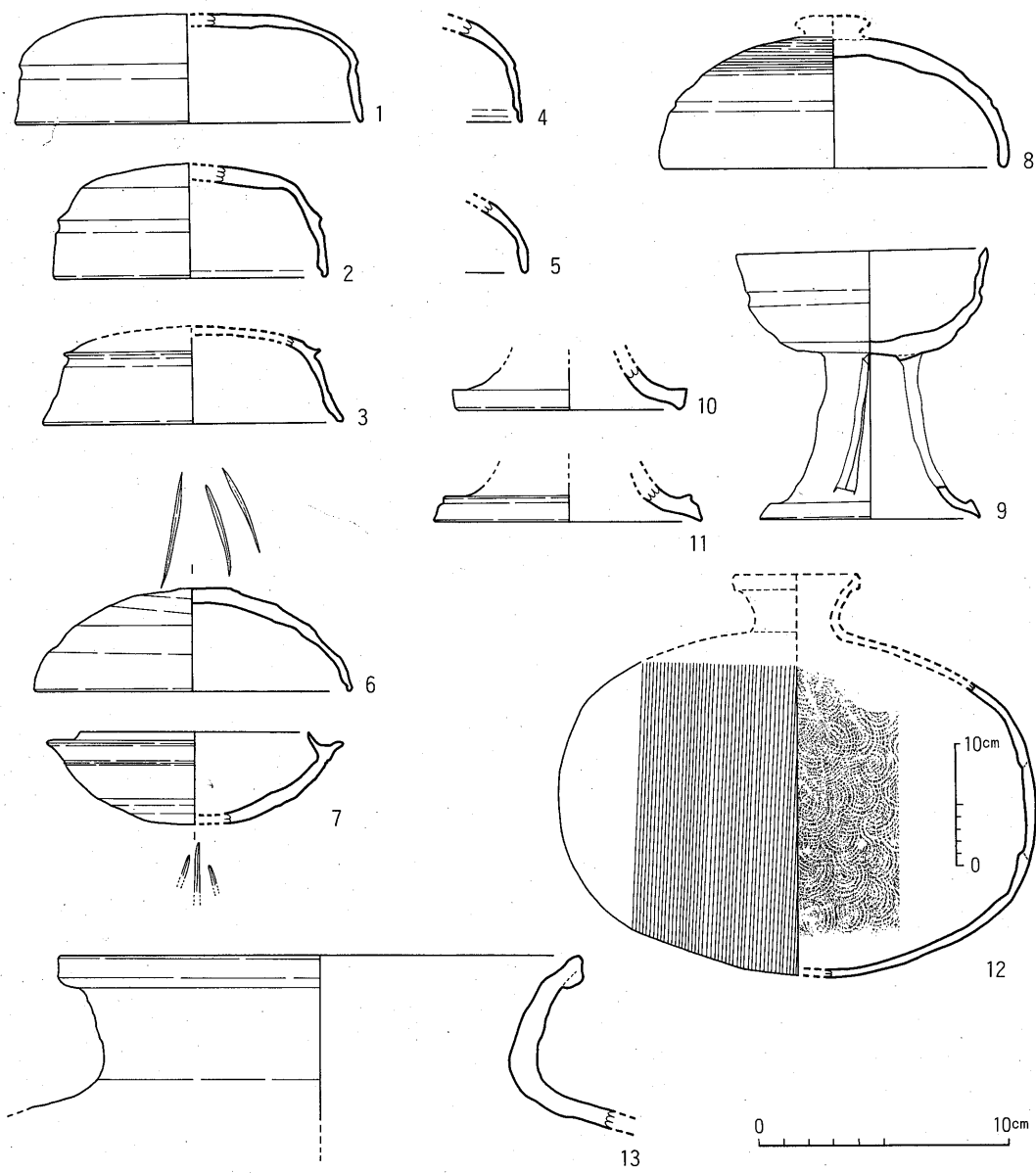


Fig 7. 出土土器

IV. まとめ

古墳の構造的特色

石室構造の特色を要訳すると、

- ① 玄室プランはやや幅広の羽子板状。
- ② 腰石、壁体の塊石は小ぶり。
- ③ 板石状の腰石を横長に使用する。
- ④ 両袖部は板石を積み上げるか、または縦長の石と板石とを組合わせた折束形式のもの。
- ⑤ 天井石の架構されない「ハ」字形の短筒な羨道。
- ⑥ 仕切り石の外側から行なう閉塞。
- ⑦ 玄室床面が羨道より一段低い。

以上から本古墳はやや構造に粗雑な技法を残しているが、一応、古いタイプの横穴式石室に属するものと考えることができよう。また石室構築に際し、丘陵尾根上を選定する点は、後期古墳の多くが丘陵斜面に深い墓壙を穿ち石室を構築する場合と異なり、前代の古式古墳に通有なあり方として認知される。したがって選地の点からも本古墳を古いタイプの横穴式石室に理由づけることができよう。

出土遺物の示す年代

墳丘上部A・B出土の一括土器は古墳の構築年代を決定する資料として重要である。これらの土器の特徴は小田富士雄氏の須恵器の編年においてはⅢA期に該当するものであろう。次に石室埋土、墳丘表土などから出土した須恵器のうち坏蓋はⅢ群に分かれ形態、手法などからⅠ群→Ⅱ群→Ⅲ群の変遷が考えられる。Ⅰ群、Ⅱ群はそれぞれ小田氏編年におけるⅢA期の古・新の様相を示しⅢ群は小田氏編年のⅢB期に相当するものと考えられよう。以上をFig 9のようにまとめると今王2号墳の構築時期は墳丘上部A、Bおよび石室埋土、墳丘表土須恵器からⅢA期（6世紀前半）に推定され、ⅢB期（6世紀後半）に至るまで開口していた可能性が持たれよう。2型式に及ぶ須恵器の年代差について追葬などの葬制の問題も生じるが玄室を破壊され、遺物を失っている点から具体的な検討は困難である。

Fig 9.

墳丘上部 A・B	石室埋土 墳丘表土	小田氏編年	推定年代
○	○坏蓋Ⅰ群	ⅢA	—500
	○坏蓋Ⅱ群		—550
	○坏蓋Ⅲ群	ⅢB	—600

参 考 文 献

II、III章関係

- 石山 勲ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X X IV』福岡県教育委員会 1978
川述昭人ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VI』福岡県教育委員会 1975
酒井仁夫ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VII』福岡県教育委員会 1976
酒井仁夫ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X VII』福岡県教育委員会 1977
川述昭人ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X VIII』福岡県教育委員会 1977
栗原和彦ほか『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』福岡県教育委員会 1970
前川威洋ほか『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集』福岡県教育委員会 1977
石松好雄ほか『大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報』九州歴史資料館 1978
九州歴史資料館『大宰府の文化財』1974
山本信夫ほか「宮ノ本遺跡」『太宰府町の文化財第3集』太宰府町教育委員会 1980
山本信夫「太宰府条坊跡」『太宰府町の文化財第5集』太宰府町教育委員会 1982
森田 勉ほか「菖蒲浦古墳群の調査」『太宰府町の文化財第1集』太宰府町教育委員会 1976
高山 明ほか「阿志枝シメノグチ遺跡」『筑紫野市文化財調査報告書第1集』1972
山野洋一ほか「阿志枝古墳群」『筑紫野市文化財調査報告書第7集』筑紫野市教育委員会 1982
橘 昌信ほか「峠山遺跡」『福岡県文化財調査報告書第51集』福岡県教育委員会 1973

IV章関係

- 石山 勲ほか「新原・奴山古墳群」『福岡県文化財調査報告書第54集』福岡県教育委員会 1977
石山 勲ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X』福岡県教育委員会 1977
原 俊一ほか「浦谷古墳群I」『宗像市文化財調査報告書第5集』1982
小田富士雄ほか「野添・大浦窯跡群」『福岡文化財調査報告書第43集』1970
小田富士雄ほか「中尾谷窯跡群」八女市教育委員会 1970
小田富士雄ほか「立山山窯跡群」八女市教育委員会 1972

図版 1



a. 西から b. 東から c. 北から



a 閉塞状態

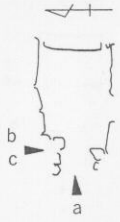


横口部



横口部

図版3



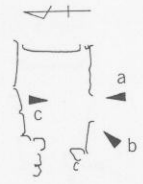
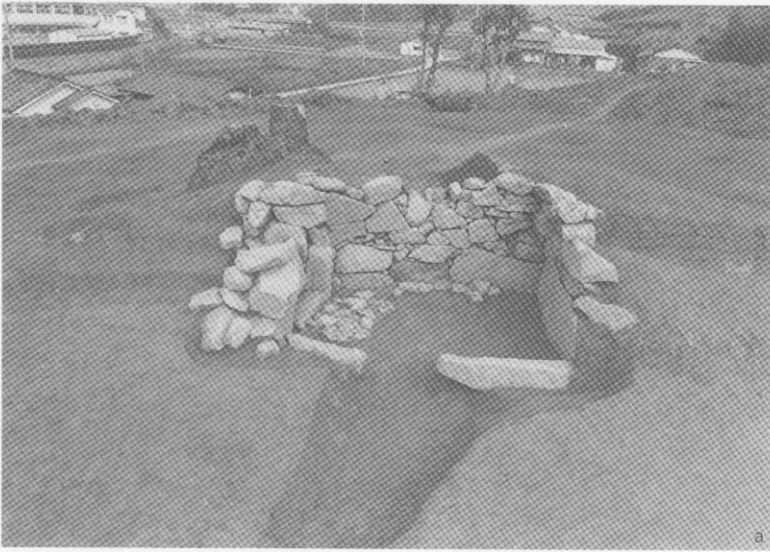
閉塞状態



閉塞石



閉塞石 除去後



a 石室



b 石室



c 石室床面

図版5



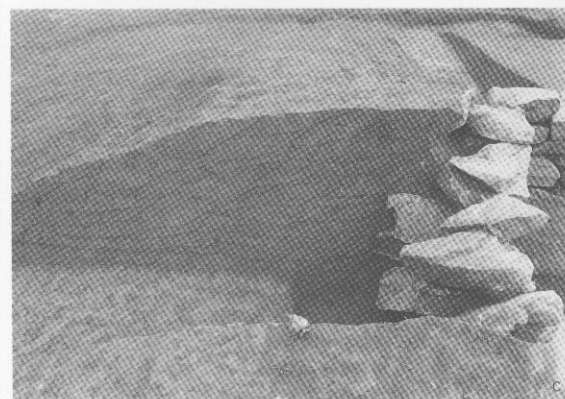
a 奥壁



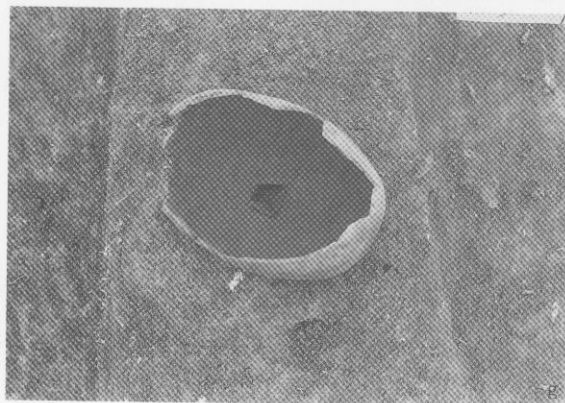
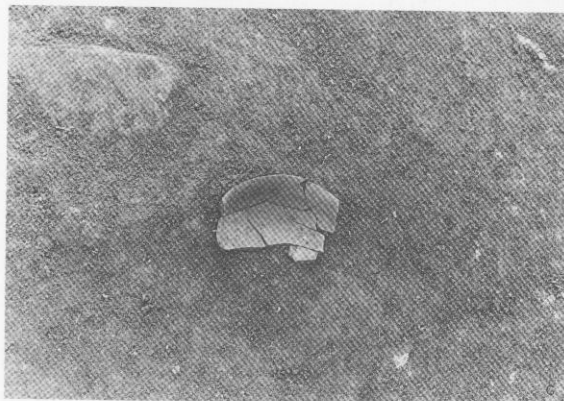
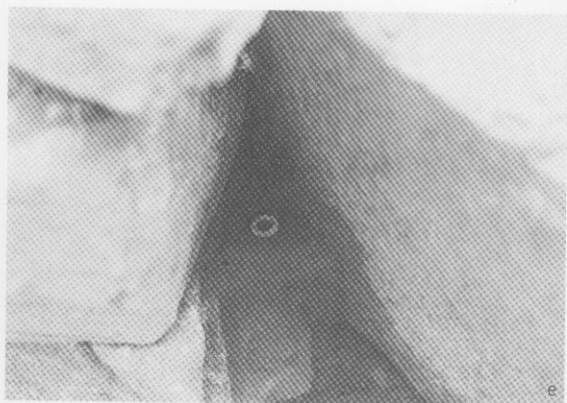
b 左袖石
と左側壁



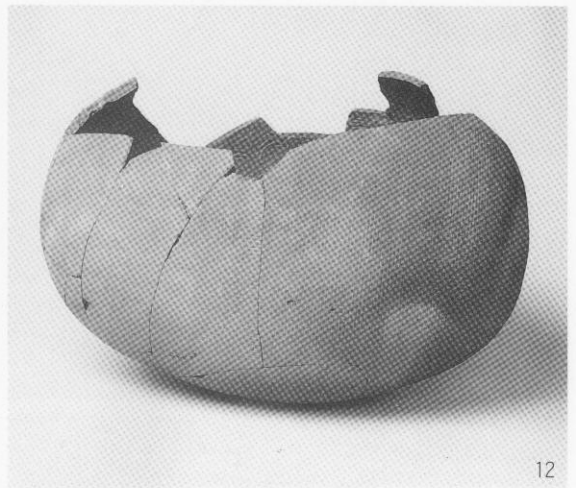
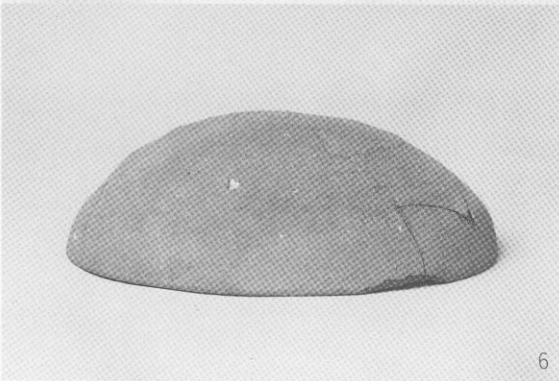
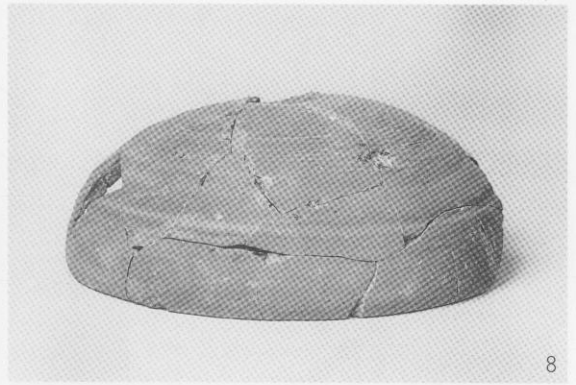
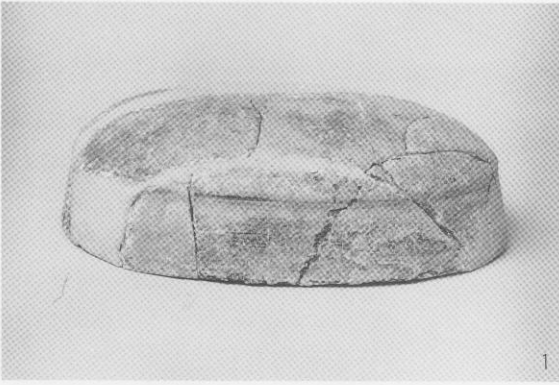
c 奥壁
と左側壁



a. 墳丘、東から b・c. 墳丘、南北土層 d. 全景、西から
e. 墳丘、北から f・g. 墳丘、東西土層 h. 裏込め状態



a. 石室と閉塞、西から b・f・墳丘土器A c. 墳丘土器B
b・e. 耳環出土状態 g. 墳丘土器A、底部穿孔
h. 墳丘土器A・B、東から



今王 2 号 墳

太宰府市の文化財第6集

1983.3.31

発行 財団法人 古都大宰府を守る会
福岡県太宰府市大字観世音寺544-3
(大宰府展示館内)

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目5番15号
